

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720167

研究課題名（和文） 漢字政策の改定が漢字使用に及ぼす影響に関する研究

研究課題名（英文） Research on the Influence that Revision of Kanji Policy Exerts on Kanji Character Use

研究代表者

小椋 秀樹（OGURA HIDEKI）

大学共同利用期間法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語資源研究系・准教授

研究者番号：00321547

研究成果の概要（和文）：

本研究は、漢字政策の改定が、実際の漢字使用にどのような影響を及ぼしたかを、大規模データに基づく漢字使用の実態調査から明らかにするものである。漢字政策の改定が漢字使用に影響を与えた例として、次のようなことが明らかとなった。

- (1) 当用漢字補正資料の削除候補字 28 字の中には、書き換え（附属→付属、濫用→乱用、膨脹→膨張、遵守→順守）が定着した等のことにより、頻度を下げている字がある。
- (2) 常用漢字表（昭和 56 年）追加 95 字のうち 78 字（82.1%）が『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の雑誌データで上位 2000 位以内に出現しており、常用漢字として定着が進んでいる。

研究成果の概要（英文）：

This study clarifies what kind of influence the revision of the kanji policy had on the real kanji use from fact-finding of the kanji use based on large-scale data. As the example that the revision of the kanji policy affected the kanji use, the following thing became clear.

- (1) In deletion candidate character 28 characters of the Toyo Kanji Hosei Shiryo, there is the character that lowers the frequency such as renewal (附属→付属、濫用→乱用、膨脹→膨張、遵守→順守) having colonized.
- (2) Joyo Kanji(1981) addition 78 of 95 characters (82.1%) appear within the higher 2000th place in *Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese* (magazines), and fixation advances as the Joyo Kanji.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2010年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文字

## 1. 研究開始当初の背景

当用漢字表（1946年、内閣告示・訓令、1850

字）は、「法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示した」漢字表で、漢字制限を目指した、制限的

な性格を持つものであった。これに対して、常用漢字表（1981年、内閣告示・訓令、1945字）は、「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」を示したもので、制限的な性格のものではなくなっている。

この「制限」から「目安」へという漢字政策の改定は、当用漢字表・常用漢字表が対象とする法令・公用文書・新聞・雑誌等を中心に、日本語の漢字使用に何らかの影響を与えたと推測されるが、実際にどのような影響があったのかは十分に明らかにされているとは言えない状況にある。

漢字政策改定の影響を明らかにするには、当用漢字表が実施されていた時期（当用漢字表時代）と常用漢字表が実施されている現代（常用漢字表時代）双方の漢字使用の実態を把握した上で、両者を比較して漢字使用にどのような変化が見られるのかを明らかにする必要がある。

このような調査・研究を行うに当たり、国立国語研究所が既に実施した以下の二つの言語調査を活用することができる。

- ①現代雑誌 90 種調査（以下 90 種調査）：  
1956 年刊行月刊・週刊誌等 90 誌を対象とした調査
- ②現代雑誌 70 誌調査（以下 70 誌調査）：  
1994 年刊行月刊誌 70 誌を対象とした調査

この二つの調査を基に、雑誌という同一の媒体を対象として当用漢字表時代、常用漢字表時代双方の漢字使用の実態を把握することができ、さらに両者の比較を通して漢字使用の変化を明らかにすることができる。（この比較分析は、まだ行われていない。）

しかし、70 誌調査の調査対象年である 1994 年から現在までに 14 年が経過しているため、より現在に近い時期（以下、単に現在と呼ぶ。）の調査が求められる。この点を補うデータとして、国立国語研究所が構築し、公開している次のコーパスがある。

- ③『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）：1976 年から 2005 年に出版された日本語の書き言葉のコーパス。この中に、2001 年から 2005 年に出版された雑誌のデータを収録。

70 誌調査と BCCWJ の雑誌データとを比較することで、1981 年の常用漢字表実施から現在までの間に、漢字使用がどのように変化したのかを、雑誌という同一の媒体で明らかにすることができるようになる。

本研究代表者は、これまでに、70 誌調査を基に常用漢字・表外漢字の出現状況、表外音訓・表外漢字の音訓の出現状況を明らかにした上で、常用漢字表の漢字使用の目安としての機能を検証した。

本研究は、上に述べたような研究の状況を踏まえ、90 種調査・70 誌調査・BCCWJ の比較・分析を通じて、当用漢字表の廃止、常用漢字表の実施という漢字政策の改定が漢字使用にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしようとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、1981 年に行われた当用漢字表の廃止、常用漢字表の実施という漢字政策の改定が、実際の漢字使用にどのような影響を及ぼしたかを、大規模データに基づく漢字使用の実態調査から明らかにすることを目的としている。

国語政策において定められた現代日本語の表記の基準は、学校教育や新聞等のメディアを通して国民の間に広く浸透している。そういう意味で、現代日本語は国語政策の上に成り立っているということもできる。しかし、実際に国語政策が現代日本語にどのような影響を与えているのかについては、実証的に明らかにされてはいない。

そこで国語政策の中でも、特に漢字政策に焦点を当て、大規模な文字調査やコーパスに基づき漢字使用の実態を把握した上で、それを基に漢字政策が実際の漢字使用に及ぼした影響を明らかにしようというのが、本研究である。

## 3. 研究の方法

### （1）当用漢字表時代・常用漢字表時代の漢字使用の実態とその変化の解明

90 種調査・70 誌調査を基に、当用漢字表時代・常用漢字表時代の漢字使用の実態を明らかにするとともに、その結果を比較・分析し、当用漢字表時代の 1956 年から常用漢字表時代の 1994 年までの 38 年間に漢字使用にどのような変化が起こったのかを明らかにする。具体的には、以下のような方法により行う。

90 種調査・70 誌調査の漢字頻度表を作成する。頻度表には、次に挙げる情報を付与する。

順位、見出し、種別（常用漢字・人名用漢字等の別）、頻度

90 種調査については、国立国語研究所報告 22『現代雑誌九十種調査の用語用字(2)』所収の「用法別漢字表」を電子化し、頻度表にま

とめ直す。70誌調査については、文化審議会国語分科会の審議資料を作成した際の電子データを活用して、頻度表にまとめ直す。

90種調査・70誌調査の漢字頻度表を基に、漢字の頻度等の面から、主として計量的な分析を加え、当用漢字表時代と常用漢字表時代における漢字使用の実態を記述する。

さらに、調査結果を比較・分析し、漢字使用にどのような変化が生じているかを明らかにする。比較の観点には、高頻度層・中頻度層・低頻度層に属する漢字の出入りなどである。

#### (2) 現在の漢字使用の実態と常用漢字表時代における漢字使用の変化の解明

BCCWJに収録する2001年から2005年刊行の雑誌データを基に、常用漢字表時代のうち現在における漢字使用の実態を明らかにする。その結果を、70誌調査の結果と比較・分析し、1994年から2005年までの間に漢字使用にどのような変化が起こったのかを明らかにする。

また、BCCWJには2001年から2005年刊行の書籍・新聞のデータも収録されているので、それらも参照しながら、現在における漢字使用の実態をより多面的に記述する。具体的には、以下のような方法により行う。

BCCWJに収録する2001年から2005年刊行の雑誌及び書籍・新聞のデータを基に、媒体別に漢字頻度表を作成する。各頻度表に付与する情報は、90種調査・70誌調査の頻度表と同一である。

BCCWJの雑誌の漢字頻度表を基に、漢字の頻度等の面から、2001年から2005年における漢字使用の実態を記述する。

さらに、70誌調査の結果とBCCWJの雑誌データに基づく結果とを比較・分析し、漢字使用の実態にどのような変化が生じているかを明らかにする。

分析に当たっては、70誌調査と調査媒体をそろえるためにBCCWJの雑誌データを対象とするが、BCCWJの新聞・書籍データの結果も参照しながら、より多面的に1994年から2005年の11年間に起こった漢字使用の変化について明らかにすることを旨とする。

比較の観点には、高頻度層・中頻度層・低頻度層に属する漢字の出入りなどである。

#### (3) 漢字政策の改定が漢字使用に及ぼした影響の解明

上記(1)(2)の分析で明らかにした、当用漢字表時代から常用漢字表時代の間(1956年から1994年)における漢字使用の変化、常用漢字表時代(1994年から2005年)における漢字使用の変化を基に、漢字政策の改定が実際の漢字使用に与えた影響を解明する。

①当用漢字表時代から常用漢字表時代の間(1956年から1994年)における漢字使用の変化、②常用漢字表時代(1994年から2005年)における漢字使用の変化の中から、1981年の当用漢字表の廃止、常用漢字表の実施という漢字政策の改定が影響していると考えられる事象を抽出する。その際の観点は、以下のとおりである。

- (1) 当用漢字表への漢字・音訓の追加により生じた変化と考えられるか否か。
- (2) 漢字表の性格の変化(「制限」から「目安」へ)により生じた変化と考えられるか否か。

抽出した事象の分析を通して、当用漢字表の廃止、常用漢字表の実施という漢字政策の改定が実際の漢字使用に及ぼした影響を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### (1) 当用漢字表時代・常用漢字表時代の漢字使用の実態とその変化の解明

90種調査、70誌調査を基に、当用漢字表時代・常用漢字表時代の漢字使用の実態を明らかにするための漢字頻度表を作成し、比較対象をしやすくするためにリレーショナルデータベースに登録した。

この頻度表を基に、当用漢字表時代及び常用漢字表時代における漢字の使用実態を記述するとともに、その結果を比較することで、当用漢字表時代から常用漢字表時代にかけて漢字使用にどのような変化が生じているのか検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①常用漢字表に新たに追加された「塔」「肌」「猫」「缶」「羅」「枠」の頻度が、90調査よりも70誌調査で高くなっている。
- ②当用漢字補正表で削除候補とされた「箇」「附」は、90種調査で1000位以内に出現していたが、70誌調査では、1501位以下となっている。これは、新聞における「箇」→「個」、 「附」→「付」という書き換えが広く定着したことによると思われる。なお、「燈」は常用漢字表で字体が「灯」に変更になったことに伴い、頻度に低下が見られた。

##### (2) 現在の漢字使用の実態と常用漢字表時代における漢字使用の変化の解明

BCCWJ(雑誌)を基に、漢字頻度表を作成した。その頻度表と70誌調査の漢字頻度表とを比較し、1994年から2005年までの間に漢字使用にどのような変化が起こったのかについて分析を行った。その結果、以下のこ

とが明らかになった。

- ①BCCWJ(雑誌)に出現した漢字は、異なり3,536字、延べ761,978字。このうち、常用漢字(1981年)が占める割合は、異なりで54.67%、延べで97.66%。
- ②雑誌70誌調査では、常用漢字(1981年)が占める割合は、異なりで53.66%、延べで97.32%。雑誌70誌調査とBCCWJ(雑誌)とを比較すると、異なりで約1%の増加が見られるのみであり、全体としては大きな変化がない。
- ③雑誌70誌調査で出現した漢字を高頻度層(1-1500位)、中頻度層(1501-3000位)、低頻度層(3001位以下)の三つに分け、BCCWJ(雑誌)でどの層に属しているかを調査した。2,688字(75%)について変動がなかった。中頻度層から高頻度層に上がったのは78字、低頻度層から中頻度層に上がったのは138字であった。一方、高頻度層から中頻度層に下がったのは78字、中頻度層から低頻度層に下がったのは133字であった。BCCWJ(雑誌)に出現しなかったものも469字あった。
- ④2010年の改定で常用漢字表に追加された196字のうち、185字が雑誌70誌調査に出現しているが、134字は中頻度層に出現しており、BCCWJ(雑誌)でもほとんど変化がない。

(3) 漢字政策の改定が漢字使用に及ぼした影響の解明

漢字政策と漢字使用の実態との関連を見るために、当用漢字表補正資料(昭和29年、国語審議会報告)における削除候補字・追加候補字、常用漢字表(昭和56年、内閣告示・内閣訓令)における追加字、改定常用漢字表(平成22年、内閣告示)における追加字に焦点を当て、雑誌90種調査、雑誌70誌調査、BCCWJ(雑誌)での出現状況を調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ①当用漢字補正資料の削除候補字28字は、雑誌90種調査で16字が頻度9未満で「朕・璽」は出現せず、雑誌70誌調査では13字が2001位以下で「効・朕・璽・脹・謁」の5字が出現しなかった。BCCWJでは15字が2001位以下で「効・朕・謁・脹・虞」の5字が出現しなかった。当用漢字表補正資料で削除候補に掲げられるとともに、書き換え(附属→付属、濫用→乱用、膨脹→膨張、遵守→順守)が定着した等のことにより、頻度を下げていくものが見られた。また「遁」「爵」のように時代や話題との関連で頻度を下げていると思われるものもある。
- ②常用漢字表(昭和56年)追加95字、改定常用漢字表(平成22年)追加196字の

BCCWJ(雑誌)における出現情報を見ると、常用漢字表(昭和56年)追加字のうち78字(82.1%)が上位2000位以内に出現しており、常用漢字として定着が進んでいることがうかがわれる。一方、改定常用漢字表(平成22年)追加字196字のうち上位2000字以内に出現するのは103字(52.6%)と半分程度であった。ただし2001-2500位に60字、2501-3000位に20字が出現している。つまり、極めて低頻度という漢字は少ないのであり、今後、常用漢字として定着していくか否か、それにより頻度に変化が見られるか等、観察していくことが必要と思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 小椋秀樹、コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査 — BCCWJ コアデータを資料として —, 第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集, 査読無, 2012, 321-328
- ② 小椋秀樹、漢字使用の実態 — 表外訓・表外字の使用について —, 国文学解釈と鑑賞, 査読無, 76巻1号, 2011, 67-75

[学会発表](計2件)

- ① 小椋秀樹、コーパスに基づく現代語表記のゆれの調査 — BCCWJ コアデータを資料として —, 第1回コーパス日本語学ワークショップ, 2012年3月6日, 国立国語研究所
- ② 小椋秀樹、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における現代語表記のゆれ, 第98回国語語彙史研究会, 2011年9月18日, 奈良女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小椋 秀樹 (OGURA HIDEKI)

大学共同利用期間法人人間文化研究機構  
国立国語研究所・言語資源研究系・准教授

研究者番号: 00321547